

小児の健康度の評価と向上に関する研究

分担研究者 木村三生夫（東海大医・小児科学）
研究協力者 平山宗宏，日暮真，小林臻（東大医・母子保健学）
巷野 悟郎（都立府中病院）
小林 芳文（横浜国大・教育学）
川井 尚（都精神医学総合研究所）
高橋 種昭（淑徳短大・社会福祉学）
高石 昌弘（国立公衆衛生院）
沢田 啓司（日本総合愛育研究所）
高山 忠雄（都補装具研究所）

研究結果の概要

小児の健康度を正しく評価しその健康状態を把握することができれば、健康を阻害している因子を知ることも可能となり、対策を構想することもできて、健康度を向上させ、小児の健全な発育を図れることとなる。

健康度を評価する方法としては身体計測もあるが、そのみでよいというものではなく、きわめて多くの面から見ていかななくてはならない。しかしながらあまりにも多くの項目を挙げるとすると評価をおこなうことが容易ではなくなってしまふ。適当な数であってかつその年齢にとって重要である評価項目を選択することが肝要であり、本研究の目標の1つである。

このために小児を適当な年齢群に分け、それぞれに適当と思われた知的能力および運動能力の項目を選び、それぞれの到達度を研究することとした。本年度はパイロットスタディーとして、神奈川県厚木市において1才から6才の保育所在籍児童1,079名を対象としておこなったアンケート調査の成績を報告する。

年齢群は12か月から17か月まで、18か月から23か月まで、2才児、3才児、4才児、5才および6才児の6群に分け、それぞれに知的能力および運動能力について13の質問を設けてその到達度を検討した。設問のほとんどが80%以上の到達度を示していたが、3才児で片足けんげんのできるもの77.0%、約束・順番を守る71.4%、4才児で近所のよく知っている所への簡単な

お使いができる76.1%などが到達度の低いものとして挙げる事ができた。

これにあわせて健康診査・育児相談をうけたか、予防接種歴、伝染病既往、入院の有無、けいれんの既往、むし歯、気になるくせ、おやつを含めた食事の問題、睡眠、排泄、遊びなどについての調査もおこなった。

12か月頃健康診査をうけたものはほぼ70%で、3才頃もほぼ同率であった。これに比べ1才6か月頃の健康診査をうけたものは2才児で約43%、3才児で約22%ときわめて低率であることが注目された。

予防接種を全くうけていないものは2才以上では1%台に過ぎず、ポリオがもっともよく接種されており、ツ反とBCG、3種混合または2種混合も75%以上が接種されている。はしかワクチン接種率は50%に達していなかった。

その他の調査項目についてはほぼ予想された通りの成績がえられた。

健康を阻害する因子として本年度は小児のけがをとりあげて検討を加えた。不慮の事故は小児の死因の中で主要な地位を占めているが、死亡に至らないまでも後遺症の発生は問題であり、けがを恐れるあまりに小児の活動に制約が加えられるようなことになれば、小児の健全な発育に影響を及ぼすことは必至である。本年度は都市と農村の小児のけがの実態を比較検討した。

対象は東京都練馬区の2,981名と純農村としての955名（長野県東筑摩群）である。両者の

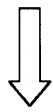
中間として中小都市である神奈川県伊勢原市の2,802名についても調査をおこなった。年齢は3才から6才が主であるが1才および2才と少数の7才が含まれている。東京と長野を対比してみると、家族数は東京で5人以下が90%をこえていたのに比し長野では5人以下のものは52.8%とやっと半数をこえたに過ぎず、都会における核家族化の傾向が数字で裏づけられた。居住形態については東京での一戸建住宅が半数に達しないのに比して長野では94.5%が一戸建住宅に居住していて明らかな差があった。

1年間のけがの回数については年長になるほど東京の方が多くけがをする傾向が男女ともにかわられている。医師にみてもらうほどのけがの率も東京の方が明らかに高かった。傷害部位・傷害の種類に関しては両者の間に大きな差は見られなかったし、事故発生場所についてもほぼ同様の傾向であった。共通していえることは低年令で頭部・顔面の受傷が多く、年令が進むにつれて下肢の受傷が高率となること、低年令で切傷、高年令で擦過傷が多いこと、低年令では屋内、高年令では屋外の受傷の多いこと、直接原因としては転倒がもっとも多かったことなどが挙げられる。

身体能力と知的能力のけがとの関連を見る目的で、障害児のけがに関する調査もおこなった。対象は東京都肢体不自由養護学校在籍児童生徒の全数であり、1,577名の6才から24才、能力的には2才から5～6才のものについて検討した。以前の概念と比べ現在これら施設に在籍しているものには知的能力の劣るものが多いことは留意されるべきである。

けがの種類としては、打撲・コブおよび裂傷の2群が圧倒的に多かったが、進行性筋ジストロフィーの骨折（特に上肢）、脳性まひの裂傷の多いことが目立った。移動能力、手の能力、知的能力の高いものほどけがの発生が多くなる傾向があった。

以上本年度の研究結果の概要を報告したが、次年度はすでに収集されたデータの解析を進めるとともに、健康度評価の目的でおこなったアンケート調査を全国的規模に拡大したものを検討し、健康度を評価するのに適当な項目を選定することを第1の目標とする予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究結果の概要

小児の健康度を正しく評価しその健康状態を把握することができれば、健康を阻害している因子を知ることも可能となり、対策を構じることもできて、健康度を向上させ、小児の健全な発育を図れることとなる。

健康度を評価する方法としては身体計測もあるが、そのみでよいというものではなく、きわめて多くの面から見ていかななくてはならない。しかしながらあまりにも多くの項目を挙げるとすると評価をおこなうことが容易ではなくなってしまう。適当な数であってかつその年齢にとって重要である評価項目を選択することが肝要であり、本研究の目標の1つである。

このために小児を適当な年齢群に分け、それぞれに適当と思われた知的能力および運動能力の項目を選び、それぞれの到達度を研究することとした。本年度はパイロットスタディーとして、神奈川県厚木市において1才から6才の保育所在籍児童1,079名を対象としておこなったアンケート調査の成績を報告する。

年齢群は12か月から17か月まで、18か月から23か月まで、2才児、3才児、4才児、5才および6才児の6群に分け、それぞれに知的能力および運動能力について13の質問を設けてその到達度を検討した。設問のほとんどが80%以上の到達度を示していたが、3才児で片足けんけんのできるもの77.0%約束・順番を守る71.4%、4才児で近所のよく知っている所への簡単なお使いができる76.1%などが到達度の低いものとして挙げる事ができた。

これにあわせて健康診査・育児相談を受けたか、予防接種歴、伝染病既往入院の有無、けいれんの既往、むし歯、気になるくせ、おやつを含めた食事の問題睡眠、排泄、遊びなどについての調査もおこなった。

12か月頃健康診査を受けたものはほぼ70%で、3才頃もほぼ同率であった。これに比べ1才6か月頃の健康診査を受けたものは2才児で約43%、3才児で約22%ときわめて低率であることが注目された。

予防接種を全くうけていないものは2才以上では1%台に過ぎず、ポリオがもっともよく接種されており、つ反とBCG.3種混合または2種混合も75%以上が接種されている。はしかワ

クチン接種率は50%に達していなかった。

その他の調査項目についてはほぼ予想された通りの成績がえられた。

健康を阻害する因子として本年度は小児のけがをとりあげて検討を加え心不慮の事故は小児の死因の中で主要な地位を占めているが、死亡に至らないまでも後遺症の発生は問題であり、けがを恐れるあまりに小児の活動に制約が加えられるようなことになれば、小児の健全な発育に影響を及ぼすことは必至である。本年度は都市と農村の小児のけがの実態を比較検討した。

対象は東京都練馬区の2,981名と純農村としての955名(長野県東筑摩群)である。両者の中間として中小都市である神奈川県伊勢原市の2,802名についても調査をおこなった。年齢は3才から6才が主であるが1才および2才と少数の7才が含まれている。東京と長野を対比してみると、家族数は東京で5人以下が90%をこえていたのに比し長野では5人以下のものは52.8%とやっと半数をこえたに過ぎず、都会における核家族化の傾向が数字で裏づけられた。居住形態については東京での一戸建住宅が半数に達しないのに比して長野では94.5%が一戸建住宅に居住していて明らかな差があった。

1年間のけがの回数については年長になるほど東京の方が多くけがをする傾向が男女ともにかがわれている。医師にみてもらうほどのけがの率も東京の方が明らかに高かった。傷害部位・傷害の種類に関しては両者の間に大きな差は見られなかったし、事故発生場所についてもほぼ同様の傾向であった。共通していえることは低年齢で頭部・顔面の受傷が多く、年齢が進むにつれて下肢の受傷が高率となること、低年齢で切傷、高年齢で擦過傷が多いこと、低年齢では屋内、高年齢では屋外の受傷の多いこと、直接原因としては転倒がもっとも多かったことなどが挙げられる。

身体能力と知的能力のけがとの関連を見る目的で、障害児のけがに関する調査もおこなった。対象は東京都肢体不自由養護学校在籍児童生徒の全数であり、1,577名の6才から24才、能力的には2才から5~6才のものについて検討した。以前の概念と比べ現在これら施設に在籍しているものには知的能力の劣るものが多いことは留意すべきである。

けがの種類としては、打撲・コブおよび裂傷の2群が圧倒的に多かったが、進行性筋ジストロフィーの骨折(特に上肢)、脳性まひの裂傷の多いことが目立った。移動能力、手の能力、知的能力の高いものほどけがの発生が多くなる傾向があった。

以上本年度の研究結果の概要を報告したが、次年度はすでに収集されたデータの解析を進めるとともに、健康度評価の目的でおこなったアンケート調査を全国的規模に拡大した

ものを検討し、健康度を評価するのに適当な項目を選定することを第 1 の目標とする予定である。